



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	古田悦造先生のこと（古田悦造先生を送る）(fulltext)
Author(s)	小泉,武栄
Citation	学芸地理(71): 9-10
Issue Date	2016-02-18
URL	http://hdl.handle.net/2309/145208
Publisher	東京学芸大学地理学会
Rights	

古田悦造先生のこと

小泉 武栄*

古田悦造先生は2016年3月に東京学芸大学を退職されます。1980年4月以来、36年の長きにわたって地理学研究室に勤務されたことに、お祝いと感謝を申し上げます。長い間、本当にご苦勞様でした。

古田さん(いつもこう呼んでいたのも、以下、この呼び方で失礼します)と私は、年齢が2歳しか離れていないこともあって、ほぼ同世代のような感覚でした。本号は退職記念号ですので、祝辞や彼が指導した学生、院生の皆さんからの送る言葉がたくさん出ていますが、私は、34年間という長い期間を隣の研究室で過ごした友人として、また同僚としての立場から、思い出話を書きたいと思います。そのためいい話ばかりでなく、いろいろ困った話も出てきますが、悪しからず。

古田さんが赴任されたのは、地理学教室の第一世代の先生方が次々に退官され、教員が大きく入れ替わった時期でした。古田さんは私の後任の助手でしたが、赴任直後、今の建物への引っ越しがあり、図書か何かを片付けていたとき、「ばかだなあ。そんなことはしなくていいよ」と軽く言ったところ、彼が「馬鹿と言った」と猛然と怒り出したのが記憶に残っています。名古屋など西の方では、そんなとき、馬鹿と言わ

ず、アホというのだと初めて知り、文化の違いを実感しました。東日本の「ばか」はごく軽い言葉なのですが。

当時、地理学教室には、山下脩二さん、白坂蕃さん、上野和彦さん、私、古田さんと、30代、20代の若い教員が多く、皆元気でした。あるとき、歴史学教室の教員とサッカーの親善試合をやることになりました。日ごろから野外に出てよく歩いている地理の教員と、室内で文書を読んでいる歴史の教員では、やはり体力に差があったようで、結果は3対0で地理の圧勝でしたが、古田さんはこの時、どうせ地理が勝つものだから、3点ハンディをやろう、と勝手に約束してみんなの顰蹙を買いました。もちろん試合の後の懇親会で、うやむやになりましたが。当時、教員と院生や学生のソフトボールの試合もよくありました。どうも遊んでばかりいたみたいですね。

古田さんの思い出といえば、やはりお酒です。いつの頃からか定かではありませんが、ある時から彼は毎日のように、夕方の5時か6時になると、研究室で酒を飲み始めるようになりました。私も時々つき合いましたが、彼は飲み癖が悪く、からむので閉口しました。夜遅くまでつき合わされて迷惑を被った学生や留学生も少なくないはずです。T君のように、研究室からしばしば

* 東京学芸大学地理学会会長・東京学芸大学 名誉教授

飲み屋に連れ出され、さらに自宅までつき合わされた学生もいます。こんなこと今では考えられませんが、まだ許されるよき時代だったのでしょう。

また古田さんの部屋は書類や本が乱雑に積み重ねられ、ほとんど「ゴミ屋敷」の状態になっていました。なぜか整理整頓ができない性格のようで、廊下にも物がはみ出し、私のところに来たお客がこれを見て目を丸くしていたのを思い出します。まあここまで行くと、一種の名物だったといえるかもしれません。

こんな「問題児」でしたが、古田さんは一面でダジャレと歌の好きな、いいおじさんであり、義理と人情に厚く、面倒見のいい教育者でもありました。彼のところにはいい学生がたくさん集まりました。彼の指導はけっこう厳しいものでしたから、学生はよく鍛えられ、おやっと思ふような中身の濃い卒論、修論が出てきました。いい論文を書き、発表会で堂々と発表していた人たちのことを思い出します。彼らは社会にでてからも、学生時代に鍛えられたことを自信に、活躍していることでしょう。優れた研究者になった人も少なくありません。天野宏司君(駿河台大学)や、坂田宏之君(たましん地域文化財団)を始めとして、そういう学生は何人もいます。惜しまれるのは中藤淳君です。彼は古田さんが指導した初期の院生で、人柄もよく、みんなに担がれて今回の古田さんの退職記念事業の委員長になることを引き受けてくれました。しかしその直後に交通事故で亡くなってしまいました。誠に残念としかいいようがありません。

古田さんは東京近辺では珍しい歴史地理学の研究者でしたので、彼の元には他大学を出て東京学芸大学の大学院に進学してくる学生が少なくありませんでした。またK類日本研究教室を

担当していたので、中国や韓国からの留学生もかなりの数にのぼります。彼はそういう人たちの面倒をよくみました。その縁で中国や韓国にはよく出かけていたようです。院生や留学生の中には本号に論文を寄稿したり、思い出を載せたりしている人が何人もいますので、ご覧下さい。

古田さんは教育面だけでなく、東京学芸大学地理学会にも大きな貢献をしています。「学芸地理」に論説・研究ノートが数編あるほか、会員や市民向けの野外巡検の主催という点では群を抜いていました。国分寺崖線と貫井神社、玉川上水とその分水、府中市の大国魂神社といった、大学からそれほど遠くない地域での日帰り巡検はそれこそ彼の御箱でした。

こういうことをみていると、人間とはつくづく不思議なものだと思います。この人はいい人だと多くの人が言ったとしても、いやそうではないという人が必ずいますし、逆にこの人は困った人だと大部分の人がいったとしても、いやそんなことはない、私はその人が好きだよ、という人が何人もいます。講義についてもそのまま同じことが言えます。まことに不思議なことですが、そういうことがあるからこそ、人間というものが面白く、人生捨てたものではない、ということなのかもしれません。

まあ私もこんな文章を書いているのですから、碌でもない人間だということが見え見えですが、古田さんには、いろいろ迷惑をかけられつつも、なかなか面白い魅力的な人だと思っていたことを、ここで改めて述べたいと思います。古田さんは最近、入院されたことがあったそうで、退職後の健康面がいささか心配です。どうか身体を労りながらこれからの人生をお過ごしいただきたいと思います。どうぞお元気で。